

日本の作文教育の問題点とライティング・センター —和歌山大学経済学部の文章作成指導はいかにあるべきか—

Problems with Current Composition Education in Japan
and the Present Situation of the Writing Center:
A Proposal for Effective Composition Education Procedures

藤 木 剛 康

Takeyasu FUJIKI

Abstract

This paper consists of four sections. First, I outline several problems with current Japanese ways of teaching composition. The second section looks at what the Waseda University Writing Center is doing to deal with these problems. The paper then proposes effective procedures for teaching composition suitable for use in coursework done in the Faculty of Economics, Wakayama University. The final section of the paper describes the author's attempts to implement these procedures during the Freshman Seminar II .

本学部の教員ならば、毎年卒業論文の提出シーズンに頭を抱えた経験をお持ちなのではないだろうか。主語述語が行方不明の文、論旨や構成が全く分からない文章、脚注や段落分けのない文章、悪気すらないコピペ（少しは書き換えろよ）…。こうした頭痛の元凶は、根本的には小学校以来の日本の国語教育のあり方にまでさかのぼる問題ではあるが、その一方で、本学部の教育カリキュラムの不備にも責任の一端はあるのではないかと思われる。例えば、論述形式のレポートや試験を学生に課す際、学生に対する何らかのフィードバック——それらを添削・返却したり、明確な基準を示して評価するなど——をするのか否かは、教員個人の善意に任されてきた。卒業論文にしても、文字数を始めとする論文の規定すら明示的には存在せず、多くの学生は卒論作成に際して初めて「論文とは何か」を体験学習することになっている。

こうした実情を踏まえて、本稿の課題は、①日米の作文教育の比較、②早稲田大学ライティング・センターの紹介、を通じて本学部の文章作成指導に対する実践的な提言を行うことである。実際のところ、①は既存の文献の要約にとどまり、提言についても未だ思いつきの域

を出ないものであるが、今後の具体化に向けた経過報告としてまとめておきたい。構成は以下の通りである。まず、【1】では既存の文献に基づき、日米の作文教育を比較する。【2】では、早稲田大学ライティング・センターへのヒアリングに基づき、同センターの概要を紹介する。【3】では、【1】【2】に基づいた本学部の文章作成指導に対する提言と、筆者が担当した基礎演習Ⅱでの実践例を紹介したい。

【1】日米の作文教育を比較する⁽¹⁾

日本の初等中等教育カリキュラムにおける作文教育の特徴は、初等段階にあたる小学校においてのみ、「自由に」「感じたままの気持ちを」「子供らしく」「ありのままに」書くという指導がなされてきたことである。昭和初期以来の「綴り方」の伝統が今日に至るまで引き継がれており、共通体験、すなわち学校行事を通じた心の成長を描く行事作文と、課題本の主人公に共感することで自己変革を遂げるという読書感想文とが主流である。指導に際し、特定の文章規範（＝型）を正式に教えることはなく、良い作文とは「子供の気持ちが生き生きと書かれているもの」だとされる。すなわち、小学校の作文指導では、書くための技術ではなく、ものを書く児童の姿勢と、それを心情的に支援する教師の態度に重点が置かれているのである。そして、小学校以降の作文指導は教育カリキュラムには存在しない。つまり、一般社会では全く通用しない作文が教育カリキュラムにおける文章作成の唯一の規範となっているのである。

こうした現状に一石を投げようとしたのが、1990年代以降の大学入試で採用された小論文試験である。当時の大学関係者の問題意識としては、知識偏重の受験勉強の弊害や学生の多様性確保などの狙いがあったものと思われる。しかし、教育カリキュラムへの影響という観点から評価すれば、高校教育のカリキュラムには存在しない科目を「現場を無視したまま普及」する結果となったことは否めない。こうして、試験に採り上げられそうなテーマや論点にばかり受験生や入試関係者の関心が向かい、文章を論理的に組み立てていく技法や説得力のある文章に必要な「型」の習得が後回しになるという皮肉な事態が生じた。もともとは、詰め込み教育への反動として誕生した小論文であったのに、一部では、逆に他の科目以上の詰め込み型試験に転落してしまったのである。⁽²⁾

他方、アメリカの作文教育は日本とは対照的である。アメリカでは、小学校の最終学年に州レベルでの作文試験があり、これに一定の成績を取めなければ補習が待っている。試験で

(1) 本節での議論は主に、渡辺雅子『納得の構造——日米初等教育に見る思考表現のスタイル』東洋館出版社、2004年、および、同「日・米・仏の国語教育を読み解く——『読み書き』の歴史社会学的考察」『日本研究』35号、2007年、を参照した。

(2) 石川巧『「いい文章」ってなんだ？——入試作文・小論文の歴史』筑摩新書、2010年。

は、five-paragraph essay という形式に沿って書くことが求められる。具体的には、明確な三部構造を持ち、最初の段落でまずこの作文で何を言うのかを明らかにし、次にその主張を3つの事実で証明あるいは擁護し、結論で最初とは違う言い方で主張を繰り返すのである。このため、作文の授業では、詩やエッセイ、物語やビジネスレターなどの様々な文章の「型」——その様式独特の構成、言い回しや言葉遣い、その様式がどのようなメッセージを読者に伝えるのに効果的なのかが説明され、生徒は手本をなぞって書くことから始める。また、作文教育では批評会(ライティング・ワークショップ)も多用される。批評会では、生徒が自分の作文を他の生徒の前で読み上げ、「文章のルール」に沿って書かれているかどうかが生徒同士で議論される。エッセイの場合、全体時間の2/3が最初の段落の議論にあてられる。⁽³⁾

以上のように、日米の作文教育は対照的である。日本では小学校においてのみ、日常の経験を対象に、文学的かつ情緒的で細部の表現や描写にこだわる作文指導が行われてきた。他方、アメリカでは、説明・説得のための実用志向の作文指導が系統的に行われている。その際に重視されるのは、論理性や文章の枠組みである。⁽⁴⁾しかし、アメリカにおける作文教育も、実は1960年代までは日本と同様、人格教育の一環だった。その後、高等教育の大衆化が進んだ結果、多様な学生が大学に入学するようになり、学術論文をそれらの学生に書かせる必要から大学教員が文章指導を開始したのがきっかけだったらしい。そして、大学における文章作成指導について言えば、分厚い論文作成マニュアルの普及とライティング・センターの設置という2つの方向に向かったものと考えられる。

【2】ライティング・センターとは何か —— 早稲田大学の事例

ライティング・センターとは、欧米では1980年代以降に普及した、講義外の時間で学生の論文作成を個別に支援する機関をさす。作成支援を行うのは所定の研修を受けた大学院生であり、TAの資格で個別相談を行う。その基本的な考え方は、以下の3点である。①自立した書き手の育成。文章の最終的な出来映えを問題にするのではなく、自分の文章の客観的評価を行える書き手を育成する。したがって、個別相談においては添削ではなく指導を行う。②プロセスとしての文章作成(writing as a process)。最終稿だけではなく、構想や下書きも含めた作成過程全体での支援を重視する。③領域横断性(writing across the curriculum)。文章作成にはどの専門領域にもあてはまる共通性がある。よって、チューターと学生の専門が一致する必要はない。⁽⁵⁾

日本におけるライティング・センターは、早稲田大学や津田塾大学、金沢工業大学、龍谷

(3) ラルフ・フレッチャー、ジョアン・ポータルビ(小坂敦子、吉田新一郎訳)『ライティング・ワークショップ——「書く」ことが好きになる教え方・学び方』新評論、2007年。

(4) 三浦順治『英語流の説得力をもつ日本語文章の書き方』創拓社出版、2009年。

(5) 佐渡島紗織「自立した書き手を育てる——対話による書き直し」『国語科教育』66、2009年。

大学などで設置され、ICU 大学や三重大学など、導入を決定したり検討中の大学も増えている。以下では、2010 年 10 月 28 日に本プロジェクト担当者（大澤、藤木）が実施したヒアリングをもとに、全学レベルでライティング指導を進めようとしている早稲田大学ライティング・センターの事例を紹介したい。

早稲田大学では、2004 年の国際教養学部の新設とともにライティング・センターを開始し、2008 年からは対象を全学部拡大した。ライティング・センターのホームページによれば、同センターの主な取り組みは、①オンライン授業「学術的文章の作成」の提供と、②センターでの論文作成指導の 2 つである⁽⁶⁾。「学術的文章の作成」では、1 回 60 分の講義がオンラインで 8 回配信される。それぞれの講義を視聴した後、400～500 字の課題が出され、学生がオンラインで提出すると、ライティング・センターに所属している院生 TA が評価し、コメントを付けて返却する。8 回の講義を受講すると 1 単位が与えられる。

ライティング・センターでの論文作成指導は、予約を取った学生に対し、研修を受けた院生 TA が一人 45 分、個別面談の形式で行う。センターには数カ所のガラス張りのブースがあり、ブース内には机とイス、辞書や論文の書き方に関するマニュアル本などが置かれている。学生が持ち込むのは講義のレポート、プレゼン原稿、卒業論文などである⁽⁷⁾。ヒアリングを行った際、たまたま実際の個別面談を見学する機会を得た。TA は、学生との対話や読み合わせによって、学生の気づきを促す指導を行っていた。こうした指導を通じて、学生の方が、自分の持ち込んだ論文の不備について目を見張る速さで自覚していった様子が印象に残った。

早稲田大学ライティング・センターには教員 2 名、助手 4 名のスタッフがおり、院生 TA は現在約 20 名である。TA の育成に非常に力を入れていることが特徴であり、採用は、希望者の中から書類審査と面接で決定する。採用されれば初回研修を受けた後、ベテラン TA の個別面談を 5 回見学し、次いで、ベテラン TA 立ち会いの下で 5 回の面談を行う実地研修を経験し、ようやく院生 TA として独り立ちする。さらに、その後も毎週の TA 研修に出席しなければならない。TA 研修では、コーチングの方法など、TA として実践的に必要となるテーマについて書かれた文献を輪読しているそうである。TA に対する謝金は時給 1100 円の教務補助から始まり、実績を積みば 2000 円の教育補助への昇格も認められている。

さらに、2010 年からは文部科学省の大学教育推進プログラム（教育 GP）「全学規模で行う学術的文章作成指導——大学院生が個別フィードバックする初年次 e ラーニング・プログラム」が開始される。このプログラムでは、初年次教育の一環として「学術的文章の作成」講義を全学部の学生約 9800 人に提供することをめざしている⁽⁸⁾。

(6) 早稲田大学ライティング・センター <<http://www.cie-waseda.jp/awp/jp/wc/>>

(7) 佐渡島紗織「大学における『書くこと』の支援——早稲田大学国際教養学部における『ライティング・センター』の発足」『全国大学国語教育学会発表要旨集』109, 2005 年。

(8) GP ポータル <<http://gp-portal.jp/src/ippan/shoukaiPage.cfm?id=1929>>

【3】提言と実践

以上の知見を踏まえ、本学部での文章作成指導について以下の提案を行う。第一に、複数の教員による編集委員会を設置して「文章作成ガイドライン」を作成し、基礎演習や卒論指導などで活用して学生に普及すべきである。これまでのように、教員の個人添削のみで論文作成法を学生に普及するのは個々の教員の負担が大きく、また、当該の講義が終わればそこでの指導はその講義限りのものとして受け取られる可能性があるため、学生側での技能や経験の蓄積が進みにくいのではないかと懸念される。基礎演習Ⅰで求められるレポートの規定、基礎演習Ⅱで求められる書評の規定、全ての講義の中間レポートや最終レポートの規定、卒業論文の規定など、可能な限り標準化を図り、「文章作成の領域横断性」に基づいた異なる講義や演習間でのシナジー効果を追求すべきである。また、ガイドラインの内容には、学術的情報の定義（一般のウェブ情報との区別）、その収集方法、引用や脚注に関する一般的なルールなどの情報リテラシーに関する内容も含めるべきである。近年、論文やレポートの書き方と銘打った書籍の刊行が相次いでおり、それらの書籍を参考にしつつ、学生が実際に論文を執筆する際の実用に供するような簡便な小冊子の形で普及することは、それほど負担とはならないのではないかと懸念される。⁽⁹⁾

第二に、このガイドラインを活用した批評会（ライティング・ワークショップ）の導入を進めるべきである。批評会の導入により、学生の参加意識の向上、文章を作成する際の姿勢の改善（論文は他者を説得するためにこそ作成する）、ガイドラインの普及、を促進することが期待できる。ライティング・センターの理念にあるように、自立した書き手の育成をめざすべきである。また、「プロセスとしての文章作成」の考え方に従えば、完成原稿だけではなく、構想や草稿の段階においても批評会を実施すべきであろう。こうした批評会の導入により、教員の負担も軽減できるのではないかと懸念される。ただし、批評会導入の前提は、論文に関する共通の理解、すなわち、「文章作成ガイドライン」の配布であろう。

最後に、筆者が担当した平成22年度の基礎演習Ⅱでの実践例を紹介したい。この基礎演習Ⅱは、20名のクラスで社会科学分野の入門的な文献を輪読させ、そのレポートないしは書評を作成させることになっている。筆者のクラスでは、島田裕巳、小幡績『下り坂社会を生きる』宝島新書、2009年および、古市憲寿『希望難民ご一行様——ピースポートと「承認の共同体」幻想』光文社新書、2010年、の2冊をテキストに、それぞれの書評を作成させた。14回の授業内容は以下の通りである。

第1回（10月5日） 自己紹介と受講生の到達・獲得目標の確認

(9) 例えば、名古屋大学高等教育研究センターでは、トピック別に必要な情報を1枚にまとめた「ファカルティガイド」が作成されている。文章作成指導に関係するものとしては、「学生に的確なレポートを書かせる」や「学生同士でレポートの読みあわせをさせる」がある。

- 第2回 (10月12日) 講義の概要説明と運営方針の確定
- 第3回 (10月19日) 『下り坂社会』1～2章の議論
- 第4回 (10月26日) 『下り坂社会』3～4章の議論
- 第5回 (11月2日) 『下り坂社会』5～7章の議論
- 第6回 (11月9日) 書評の書き方と論点整理, ディスカッション
- 第7回 (11月16日) 書評の提出と相互批評→書き直し
- 第8回 (11月30日) 書評の講評と新しい班分け, 自己紹介
- 第9回 (12月7日) 『希望難民』1～2章の議論
- 第10回 (12月14日) 若者向けシェアハウスに関するニュース番組の視聴と議論⁽¹⁰⁾
- 第11回 (12月21日) 『希望難民』3～5章の議論
- 第12回 (1月11日) 『希望難民』6～7章の議論
- 第13回 (1月18日) 論点整理とディスカッション
- 第14回 (1月25日) 書評の提出と相互批評→書き直して提出

第1回のオリエンテーションの後、全体を4つの班に分け、以後の輪読はこれらの班を単位に進めた。書評の作成に際しては資料-1「書評を書く」を配布し、その後、書評のアウトラインを作成させた。第6回と第13回では班を単位に参加者相互で書評のアウトラインを議論させた(資料-2)。その後、書評を作成させ、第7回と第14回で書評の相互批評を行わせた(資料-3)。その間、教員は積極的には議論に参加せず、議論が煮詰まっている場合や関係のない雑談を始めてしまった場合にのみ口を挟んで論点を整理し、議論を促すにとどめた。

実際のところ、今回の批評会ではそれほど深い議論はできていなかった。これは、担当教員と学生の双方の経験不足によるものと思われる。例えば、提出されたアウトラインの内容があまりに薄く活発な議論ができるようなものでなかったり、全員が輪読済みのテキストの書評であるため、多少表現が未熟であっても理解できてしまったりといった問題が散見された。今後、より密度の高い議論を促すためにはどのような工夫が必要なのか、検討する必要がある。他方、演習での議論の水準に比べ、最終的に提出された書評の水準は筆者の想定を上回っていた。特に、2本目の書評については、複数の学生が最初の書評よりは格段に書評らしい書評を作成できるようになった。これは、学生間での経験の蓄積が進んだこと、何度も議論を繰り返すことでテキストの概要を整理できたこと、また、学生同士の議論を軸に演習を組み立てたことで、学生の参加意識が高められたことによるのではないかと考えている。

(10) 『希望難民ご一行様』の1～2章は、コミュニティ論についての理論的考察がなされており、1回生にはやや難解だと思われた。このため、2010年11月9日に放映されたNHKのクローズアップ現代「住まいをシェアしてみませんか」を視聴させ、具体的なイメージを持たせるよう、テキストに関連づけて議論させた。

【資料-1】

【書評を書く】 (野村一夫「ソキウス」<<http://www.socius.jp/manner/05.html>>)

課題図書を読むレポートの場合、何が求められているのか。

簡潔にいおう。それは「書評」(book review)である。書評とは、①本の紹介をし、②その重要な論点を整理して、③各論点について自分なりに考察することである。したがって書評レポートのアウトライン・フォーマットもだいたいこの三部構成になる。

1. 本の紹介：著者はこの本で (a) 何について (テーマ) (b) どのようなアプローチで (方法・着想) (c) いかなる主張や結論をだしているか。目次を眺めながら、思いきりよくまとめる。
2. 論点の提示：著者にとって重要な論点と、自分にとって重要と思われる論点を明確に提示する。あわせて三点程度に集約させるのが無難。「第一に」「第二に」とパラグラフ (段落) を分ける。
3. 考察：各論点について論評する。これは各論点を提示した直後にそれぞれ論評してもよいし、あとでまとめて論評してもかまわない。論点によっては、さしてコメントすることもないものもあるだろうから、そういうものについては丹念に要約しておけばよい。ただし一点ぐらゐは若干のこだわりをもって議論してみよう。

さて、そうはいっても、自然とアウトラインは浮かんでくるものではない。それはむしろやりに自分の内部に生じさせるのである。そのためのいくつかのコツがある。

1. 本の読み方：書くために読むときは、あらかじめチェックを入れながら読まなければならない。5B程度の濃い鉛筆でチェックするか、借り物のときは付箋紙をはさむ。引用したい部分に傍線を引くのはけっこうだが、それ以外にも引くとなるとわずらわしいので、縦書きの本は該当文章の上部に横線を引き、横書きの本は該当文章の左側に縦線を入れておくとよい。重要度の高い箇所は二重線にしておく。
2. チェックの入れ方：著者が強調しているところ。自分が重要だと思うところ。引っかかるところ。疑問を感じたところ。同時に、それを読んだときの自分の反応も書き止めておく。長くなるときはポストイットのようなメモに書いてはさみ込んでおく。これは多ければ多いほど、あとがらく。
3. 論点のつくり方：チェックを入れたところを何回も眺めて、それらをグループ化する。

三つ前後が標準的。枝葉にあたるようなチェック項目は思いきって捨てるのがコツ。そしていったん論点を決めたら、本を読み返して関連することがらを加えて多少ふくらませる。

4. 要約の仕方：本文ツギハギ型是最悪である。そして困ったことに最悪のケースが圧倒的な多数派なのだ。本文を見てかんたんなメモをつくり、今度は本文を見ないでメモだけを参照しながら自分で文章を書く方がうまくいく。「わたしはこう読んだ」というつもりで書く。要するに、自分というフィルターを通すことだ。徹夜仕事にありがたい「自動書記」は絶対避けなければならない（それは知性的でもなく主体的でもなく能動的でもない）。
5. 引用のあつかい：必ずかぎカッコに入れる。入れないと自分が書いた文章として読まれてしまう。これは剽窃（ひょうせつ）である。原稿用紙五枚程度のレポートであれば、引用文は短いのをひとつかふたつ程度がふつう。あまりに長いもの（一枚以上におよぶもの）や多量の引用は「枚数稼ぎ」と見られてしまう。どうしても必要なときは、その分、多めに書いたほうがよい。
6. 論評の仕方：読んだときの自分の反応をつなぎとめ、それを反省的にふくらませる。それでも書くことがないと感じるときは「比較」をしてみよう。第一に、同じテーマをあつかった他の文献との比較。別の本を一冊読むのはたいへんだから、事典や教科書などの記述とくらべてみる。第二に、常識との比較。世間で一般に考えられていることとのちがいに注目してみる。社会学系の本では「脱常識」的なものが多いので有効である。第三に、自分の思い込みとの比較。書評レポートのねらいは自分を変えることだ。今までの自分の考え方にとどまる「感想」を乗り越えることがテーマなのだ。だから、従来の自分の考え方をその本を鏡にして批判的に反省してみることは、社会学の作法にかなっている。第四に、現在との比較。どんな課題図書も執筆された時点からそれなりに時間がたっている。このタイムラグにこだわってみるのもおもしろい。いずれにせよ比較してみると「ずれ」が見えてくるはずだ。その「ずれ」について考えたことが、あなただけのオリジナルな論評になる。

【資料-2】

【アウトラインの作成と議論】

2010.11.9

- ① 【書評を書く】をもとに、あなた自身の書評のアウトラインを、紙1枚、箇条書きで作成してください→「本論」で紹介する論点には的確なサブタイトルをつける、通し番号や→を使うなど、一目でわかるように作成してください。
- ② 以下の論点について、(時間の許す限り) 班のメンバーのアウトラインについて議論してください。まず、自分のアウトラインをほかのメンバーに説明し、ほかのメンバーは報告者のアウトラインについてアドバイスやコメントをしてください。
 - ① 「はじめに」で、本のテーマや著者の主張を的確に紹介しているか? 自分の紹介と比べてどうか?
 - ② 本論で説明している論点について、うまく一言でまとめているか(的確なサブタイトルをつけているか)?
 - ③ 本論で取り上げた論点について、わかりやすく説明できているか?
 - ④ 本論で取り上げた論点は、適切に選択されているか? 別に取り上げるべき論点はないか? 自分の取り上げた論点と比較してどうか?
 - ⑤ 評者のコメントはわかりやすくまとめられているか? 著者の議論とかみ合っているか? コメントの根拠は明確に示されているか? 自分のコメントと比較してどうか?
- ③ 以上の作業と議論をもとに、1600～2000字で書評を作成し、3部コピーして次回の演習に持ってきてください。必ずワープロソフトで作成し、最初に学籍番号と氏名、著者名、『本のタイトル』、出版社、出版年を明記すること。

【資料-3】

他者の書評を読み、批評する

2010.11.16

- ・ 相方の書評をできれば音読して（口をモグモグ動かすだけでもいいです）、以下の諸点についてあなたの考えをまとめてください。また、読んで分からない点については執筆者に尋ねてください。

【1】日本語表現について→赤ペンで添削してください。

- ① 誤字脱字、「てにをは」のチェック。文末表現は「である」でそろっているか？
- ② 主語と述語がきちんと対応しているかどうか。長すぎてわかりづらい文はないか？
- ③ 意味のわからない文、前の文とつながらない文はないか？

【2】文章の形式について

- ・ パラグラフ（段落）を適切に使って書評を作成しているかどうか。
 - パラグラフとは、内容的に関連のある複数の文の集まりで、それによって一つのテーマを表現するもの。複数のパラグラフによって組み立てられ、全体を通して一つのまとまった主張を伝えるのが文章。
 - 複数のパラグラフによって書評全体が組み立てられているかどうか。
 - 各パラグラフの内容に統一性（テーマ）はあるか。
 - 前のパラグラフから次のパラグラフへの議論の流れは自然か。
- ・ 著者の意見と評者の意見は明確に区別されているか→「本書では～」「著者は～」といったフレーズを使って区別されているかどうか。

【3】内容について

- ① 「はじめに」で、本のテーマや著者の主張を的確に紹介しているか？
- ② 本論で取り上げた論点について、わかりやすく説明できているか？
- ③ 本論で取り上げた論点は、適切に選択されているか？別に取り上げるべき論点はないか？自分の取り上げた論点と比較してどうか？
- ④ 評者のコメントはわかりやすくまとめられているか？著者の議論とかみ合っているか？コメントの根拠は明確に示されているか？自分のコメントと比較してどうか？